

私が修士全科生として入学したのは、化学を深めて研究したいという予てからの思いでした。また、以前から学んだことを何かの形で役立てたいと考えていたので、化学に触れている環境を維持したいということから放送大学の選科履修生や修士選科生として科目履修していたこと、偶然放送大学 OCW で化学関連の授業を聴講したことも大学院に入学するきっかけになりました。

私の研究テーマは有機色素についてです。色とは何か？という漠然とした疑問から生じたものですが、それは研究テーマとしてはテーマが広すぎるため、研究をフォーカスする様に指導教員から指導を受けました。そこで、有機色素の化学構造よりわかる発色中心部に対する置換基の効果を理論的に解析し、希望する色の変化に対する置換基は何か？という問いについて研究を進めることになりました。

研究テーマには、大学での専攻分野と異なる分野も含まれていたため、研究に使う大学院の授業は入学前に履修しました。大学院入学当初は、そこで学んだ内容はそのままベースとすることができて、文献調査を綿密に行うことができました。その中で、標的化合物を絞り、得られた化学構造を計算手法により解析し考察しました。

修士論文の執筆においては、その構成や文章表現について悩むこともありましたが、指導教員の丁寧かつ適切なご指導のお陰で仕上げることができました。在学中は、課題の提出が重なることもありましたが、家族の協力や異なるキャリアを持つゼミの方々の励ましがあり、乗り越えることができました。

大学院を修了し、指導教員の先生やゼミの方々の研究に向かう姿勢に触れられたこと、自分の内面に触れ改善点を見つけることに繋がったことが良い経験になりました。

今後も、学習は継続し自分の中での化学を広げていきたいと考えております。放送大学は、さまざまな事情を持った方々に門戸を開いている大学だと思います。年齢によらず、また私のような職業的研究者でなくても、それぞれの目的に応じて分け隔てなく先生方が応援してください。自身の関心から生まれる疑問を学術研究に発展させ、研究成果をまとめて発表するという経験を居住地や職業に関係なく行うことができる場であると考えております。最後に、指導教員の先生を始め関係者の方々には心より感謝申し上げます。

わたしは、大規模太陽光発電設備(66kV連系)の電気主任技術者として働いております。発電時に温室効果ガスであるCO₂を発生しない太陽光発電など、再生可能エネルギーに関心があり、60歳を過ぎてから携わっている仕事です。

再生可能エネルギーである太陽光発電の仕事に就いた訳ですが、一方で、地球温暖化、日本のエネルギー自給率が他の国々と比べ低いなどの背景から、再生可能エネルギーに関する研究をしたいと思っておりました。

放送大学は、通信制でありマイペースで学べることから仕事をもっている方も学べると思いい入学しました。

研究は、入学当時、再生可能エネルギーの普及に伴う電力系統の影響など、全般的な問題について研究を進めようと考えていましたが、研究の範囲が広くまとまりのないものになってしまうことに気づきました。そこで、研究を狭い範囲に絞り、太陽光発電の発電量予測の研究を行いました。

太陽光発電の発電量予測を、過去の気象状況と発電量から予測するもので、長期(6ヶ月)にわたるシミュレーションを行いました。

研究結果を修士論文としてまとめるためには大変苦労しましたが、先生の指導をはじめ、ゼミの方々のアドバイスにより書き上げることができました。修士論文は、研究の目的、問いにきちんと答えているかなど、わかりやすく書くことに重点を置きまとめました。

ゼミでは、仕事や年齢も違い、さまざまなキャリアを持った方々と一緒に学べたことで、わたしにとって、毎回、新しい発見もあり素晴らしい経験を積めたと思っております。この経験は、学生の多くが社会人である放送大学ならではのものだと思います。

放送大学大学院を修了し、入学した目的が果たせたかとの問いには、十分果たせたと思っております。修士論文をまとめ、ゼミで他の方々の研究に触れられた経験が知見を深めたと思っております。

今後は、太陽光発電設備の不具合の早期発見など、過去のデータから読み解く方法、または、太陽光発電が及ぼす環境問題などを研究したいと考えております。

放送大学大学院で、学び研究したいと思っておられる方は、是非入学して学んで欲しいと思っております。キャリアアップのため、知識を身につけたいなど、学ぶ目的は、さまざまだと思いますが、修士論文を書き上げる経験や、ゼミでキャリアの違う方々との学びが知見を深め、必ず満足できることと思います。

私は2022年度に修士全科生として入学しましたが、それ以前にも放送大学教養学部の選科履修生や修士選科生として興味のある科目を履修していました。学ぶ中で自身が興味や疑問を持ち調査したことを論文として形にしたいと考え、全科生として入学しました。

入学時点で修士論文以外の修了に必要な単位はほとんど取得していたので、全科生としての2年間はほぼ修士論文の執筆に費やすことができました。それでも、会社員であるため平日は仕事、幼い子供もいるので休日も育児などで、研究時間を満足に取れないこともありましたが、計画通りにいかないことも多々ありましたが、家族の協力や全科生同期との情報交換、指導教員のご指導により、修士論文を仕上げることができました。

私の在籍していた期間はコロナ禍の影響もあり、オリエンテーションや中間報告会、口頭試問、全てオンラインで実施していました。オンラインでは指導教員や同期とのコミュニケーションに限界もありますが、感染症拡大や災害の際も安全に学習が進められることや、地方の学生にとっては移動の時間や費用がかからない等のメリットはあるので、オンラインと対面が状況に応じて使い分けられるのも放送大学の良い点であると感じました。

私の研究テーマは生命の定義です。幼い頃から生物に興味を持っており、「生命とは何か」という問いを探求していきたいと考えていました。「生命とは何か」というテーマは広大無辺であり結論を出すことは不可能であるため、私の研究は「生物学は生命という概念をどのように捉えているか」という点に主軸を置き、これまで提案されてきた数多くの生命の定義に対して計量テキスト分析を行うことで生命を定義付ける要素について考察しました。

執筆した修士論文は何等かの形に残したいと考えていたので、放送大学大学院修了者によるオンラインジャーナル『放送大学文化科学研究』に投稿しました。オンラインジャーナルへの投稿用の論文は修士論文そのままではなく、構成を見直すことなどが必要であるため、改めて自身の研究を振り返る良い機会となりました。

修士課程修了後も放送大学教養学部に入り直し、学習は継続しています。論文執筆など研究活動も継続していきたいと考えています。放送大学は、私のように職業的な研究者ではない者が自身の興味関心に基づいて研究を行い学術的な成果を生産・発表できる貴重な場であると思います。こうした非職業的研究者が生産する学術的成果は学術的知見の多様性を生み出すことができると思いますので、放送大学はそのような意義のある場であるとも考えます。

私は、当時岡山県内の中学校に勤務し、多忙な日々を送っていました。そのようななかで、日頃指導している数学について、専門性を高めたいという気持ちから、思い切って放送大学大学院受験を決意しました。

大学院入学後は、以前勉強していた「格子の数学」について研究しました。自宅に近い香川大学の整数論がご専門の先生からご指導いただき、その成果を放送大学本部での数理学セミナーで発表しました。セミナーは休日に行われるため、休暇を取らなくてもよく非常に助かりました。ここには、数理学に興味をもたれた仲間が全国から集まり、アットホームな雰囲気で互いに研究を深め、研究の楽しさも実感することができました。ご指導くださった先生方や院生のみなさんに感謝しています。同期のなかには、博士課程に進学された仲間もいました。私も刺激を受け、数年後に兵庫教育大学の博士課程に進学しました。放送大学で学んだ経験は、今でも私の一生の宝物です。

修士全科入学の切っ掛けは、選科生として3年が経ち、単位も揃ってきたことから、大好きな恐竜の話を地域の子供達に伝えたいという予てからの思いを実現するために、研究に駒を進めようと考えたことでした。しかし入学時点ではどのような研究をするかアイデアはなく、他の入学生の方々の高い志に触れて、安易に入学したことを後悔した程でした。そのような中、大森先生から九州産恐竜化石情報のデータベース化を提案されました。データベースならば本業との兼ね合いで前に進めると考えてテーマとしました。研究では多くのつまずきもありましたが、新たに恐竜化石情報を入手できた時は年甲斐もなくワクワクしながらデータベースに入力しました。これを繰り返しながらの研究は、当初の予想を遙かに超える楽しい2年間となりました。これは更に、リタイア後の私が継続して取り組むべきことも教えてくれました。大森先生を始め関係者の皆様に大変感謝しております。